



JICA研究所
プロジェクト・ヒストリー・ミュージアム
JICA Project History Museum

南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち

ゼロから産業を創出した国際協力の記録

日本/チリ・サケプロジェクト

2. ゼロからの出発：サケ孵化場の建設と稚魚の養殖 (コジャイケ)

提供：長澤 有晃 氏



空港で検疫、引取り立会いの長澤専門家(1972年11月)。実験のため、初めて北海道からチリヘサクラマス(Cheerry Salmon)の発眼卵15万粒が送られた。サンチャゴ空港にて。



北海道のサケ受精卵が70時間を要してサンティアゴ空港に到着。
待機中の空軍機で現地(コジャイケ)へ輸送。



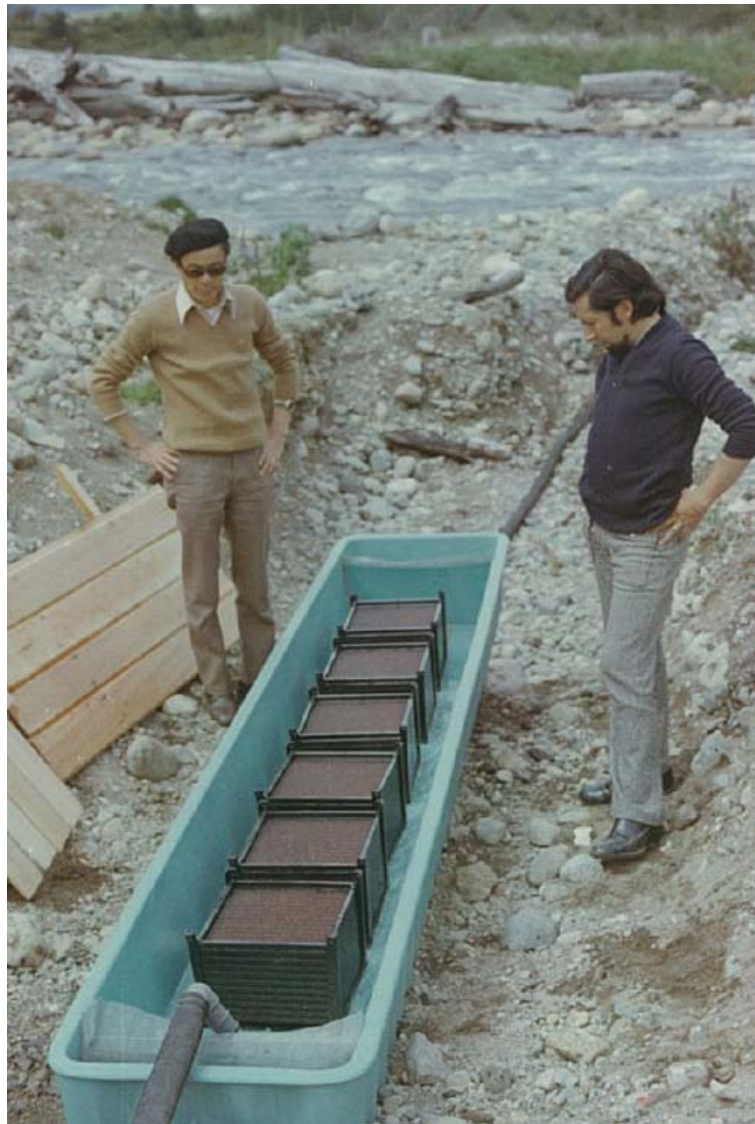
1972年。実験用にサクラマス発眼卵15万粒が届いたが、現地には施設は何も無かった。日本から持って来たアトキンス式孵化器10個とチリ国内孵化場から借りた水槽だけで川水を引いて川原で野外実験を行った。



最初の孵化実験場



コジャイケ クラロ川畔(1972年11月)
卵の状態を点検中の長澤専門家。卵は正常に発育、孵化寸前だった。



最初の野外孵化実験場

コジャイケ・クラロ川にて(1972年11月)



最初の孵化実験場

河原に孵化器と水槽を設置してサクラマス15万粒を孵化させた(1972年11月)。



チリにおける史上最初のサクラマスの子魚を孵化場近くのシンプソン川に放流(1972年12月)。



白石博士の追悼の辞を述べるウンドラガ、コジャイケ市長(1972年)。



実験段階が終わり、プロジェクトとなり、シロサケ300万粒の種卵の輸送が始まった。



5万粒入りケース60箱。300万粒のシロサケ発眼卵が毎年北海道からコジャイケへ空輸された。



シロサケ放流式(1974年)



チリ政府は孵化場の建設を開始。先ずは、橋の建設から始まり、渡り初め式を行った。これにより資材の運搬が可能となった。テープカットはアイセン州知事。



取水ダム。これが難工事だった。



1973年のクーデターの後、チリ政府により孵化場が建設された(1974年)。



落成式(1976年)

1974年孵化場の建設が始まり、1976年完成。建物はチリ側、中の実験設備等は日本側が負担。年々拡充整備されていった。



完成した白石博士孵化場(1976年)



孵化場前に設置されたプレート(1976年)

この場所を選定してチリ側へ進言した数日後に、コジャイケで急逝した白石博士の名を記念して、ドクトル・ヨシカズ・シライシ養魚場と命名された。



孵化室内部



野外の養魚池 (Fry Pond) も完成し、稚魚の大量生産が可能となった。しかし、餌がなく、すぐ放流するしかなかった。



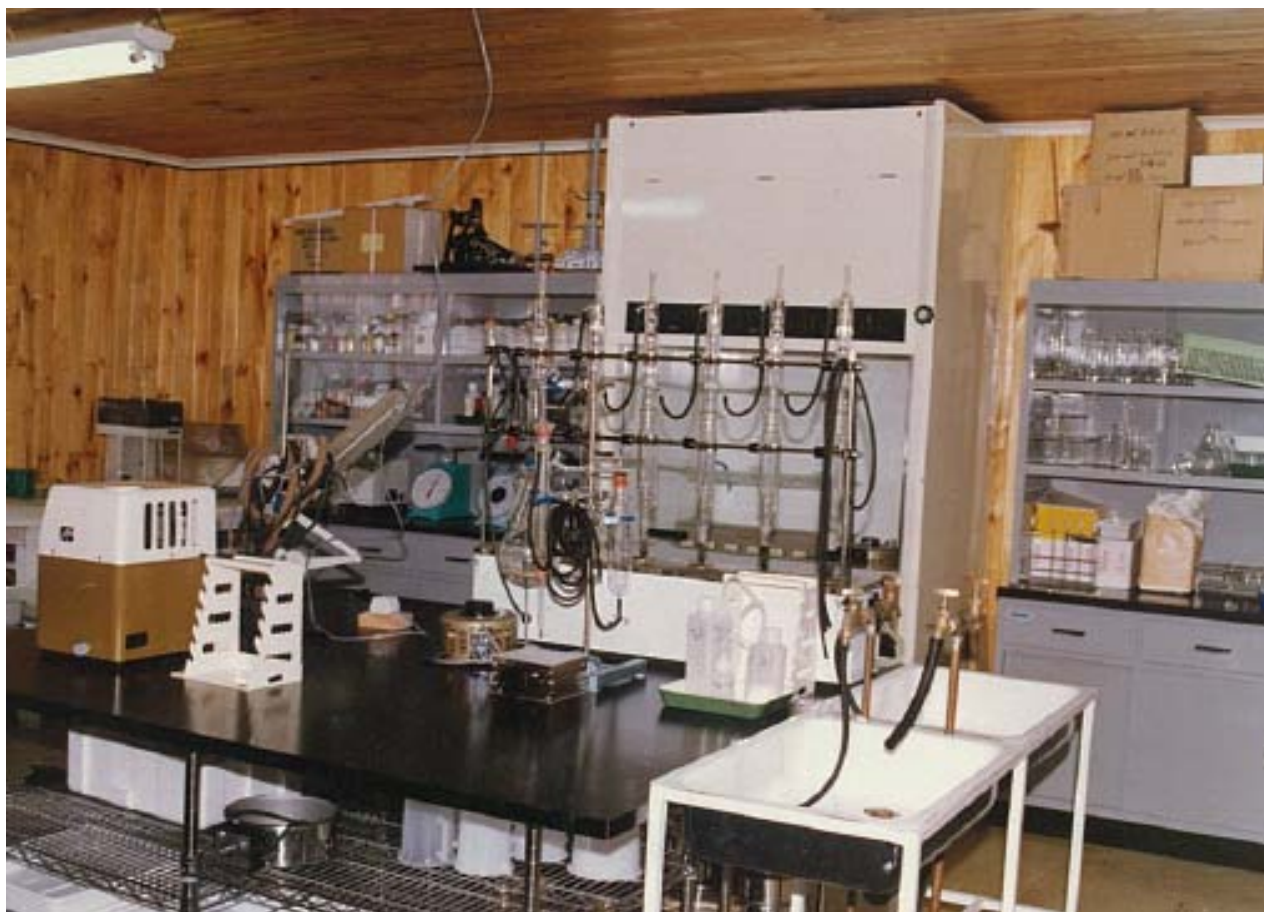
日本から当面の餌が供給されたので、給餌水槽を増設した。



餌料開発研究室を作り、餌の自場生産を開始した。オープニング儀式。
神父による感謝の祈り。対面には小村在チリ日本大使。



飼料開発研究室。建物はチリ側、中の機材と人材育成は日本側が負担。



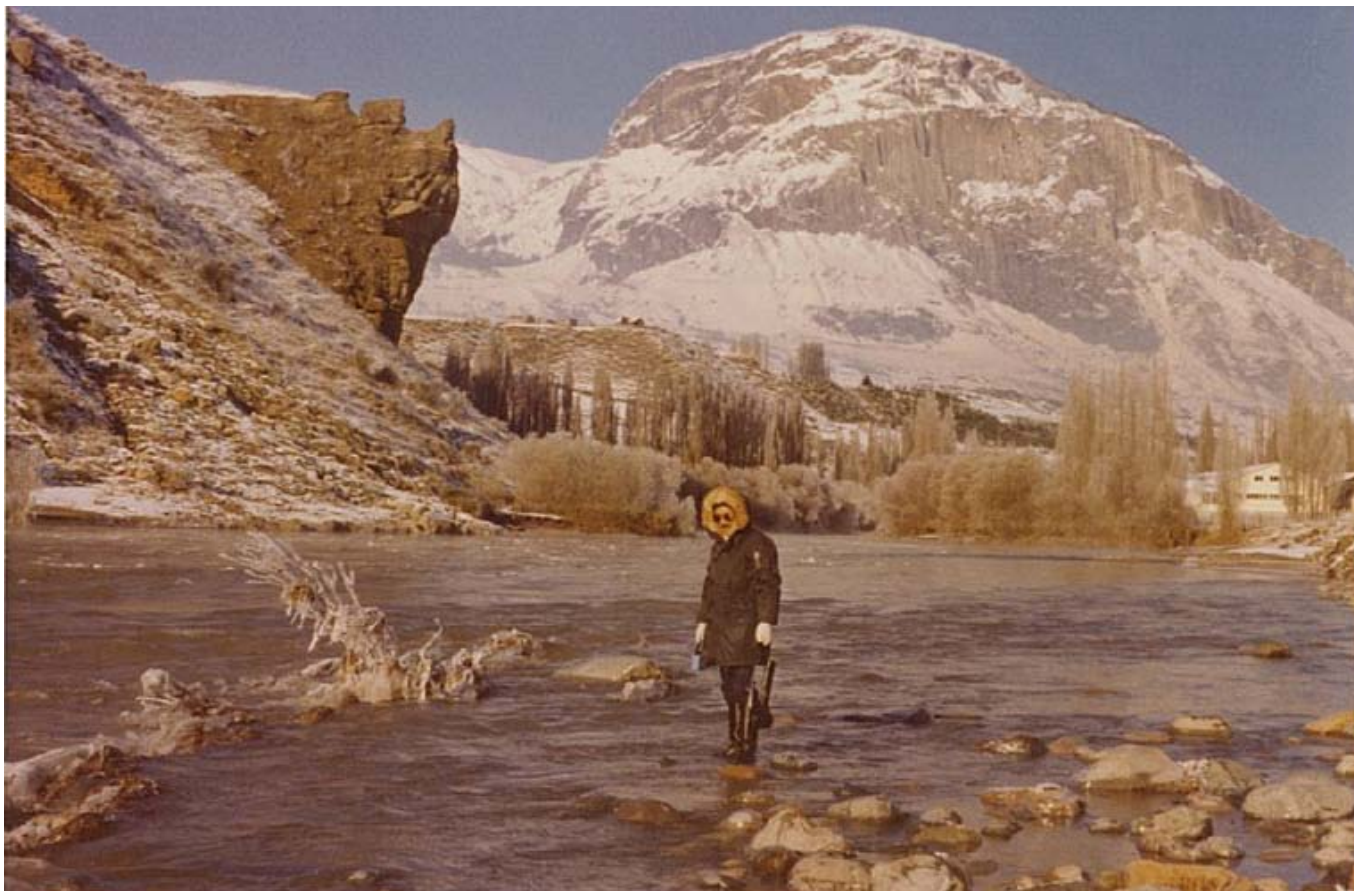
飼料開発研究室



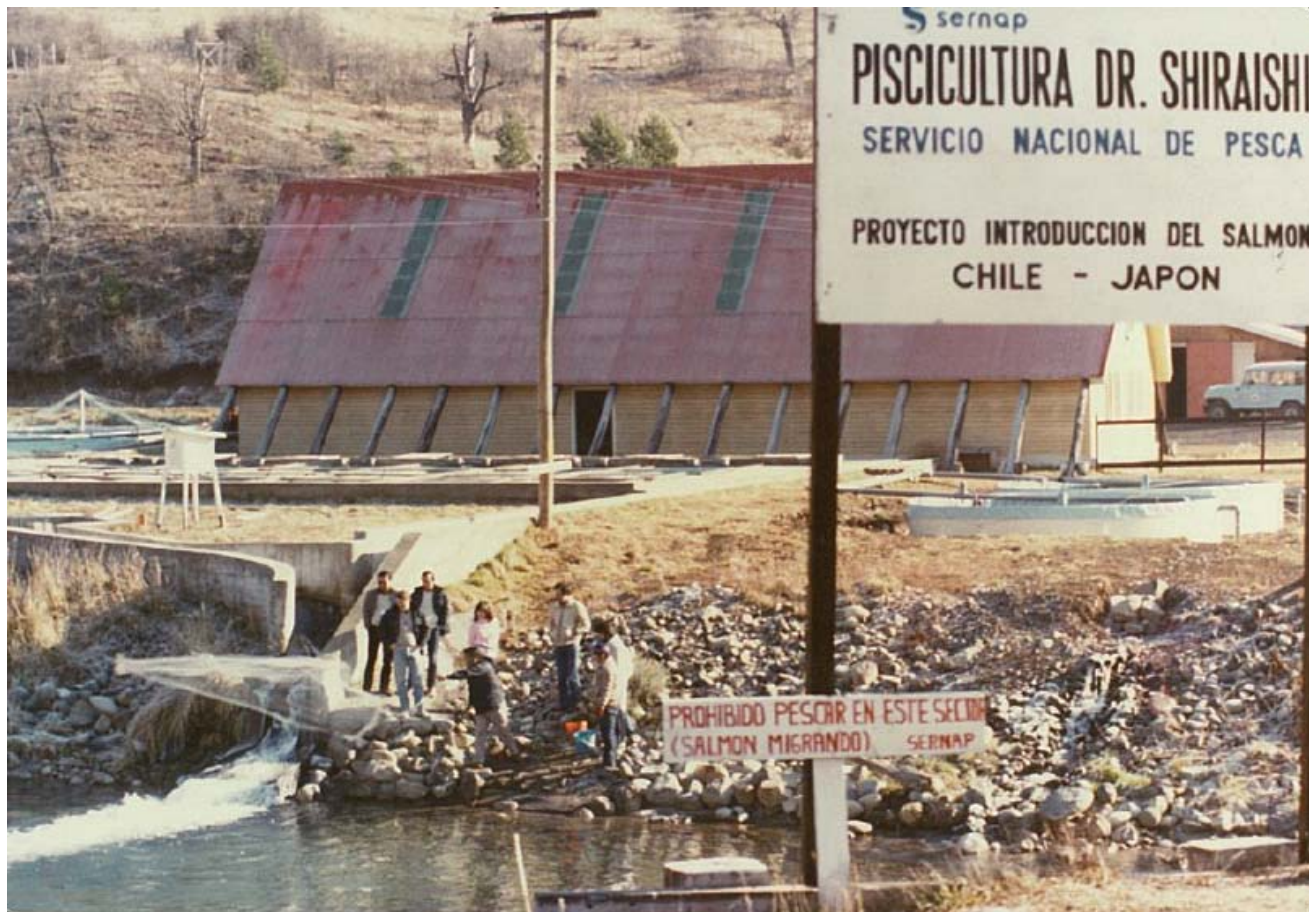
シライシ孵化場の全景(1976年6月冬)。







シライシ孵化場付近のシンプソン川の冬の光景(7月)。マイナス15℃にもなる(1977年)。パタゴニアの冬は厳しい。川にはシャーベット状の氷が流れる。



シライシ孵化場に立つ日本/チリ・サケプロジェクトの看板(1979年)。
放流された稚魚を見守る職員達。



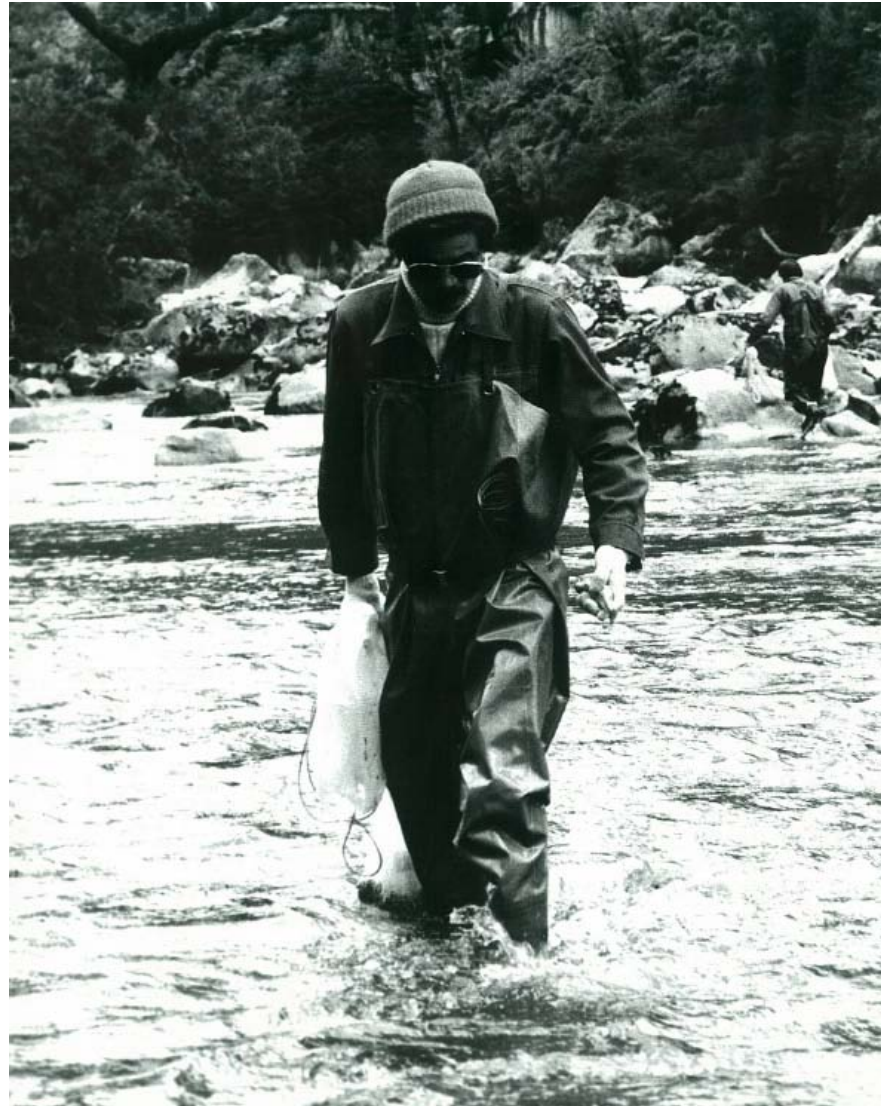
放流稚魚の追跡調査

JICAからジープが供与され、シンプソン川下流60キロまで調査して、稚魚の降海を確認した。



放流稚魚の飼育調査

大型のマス(ブラウントラウト)が多数捕獲され、胃袋からサケ稚魚が多数確認された。



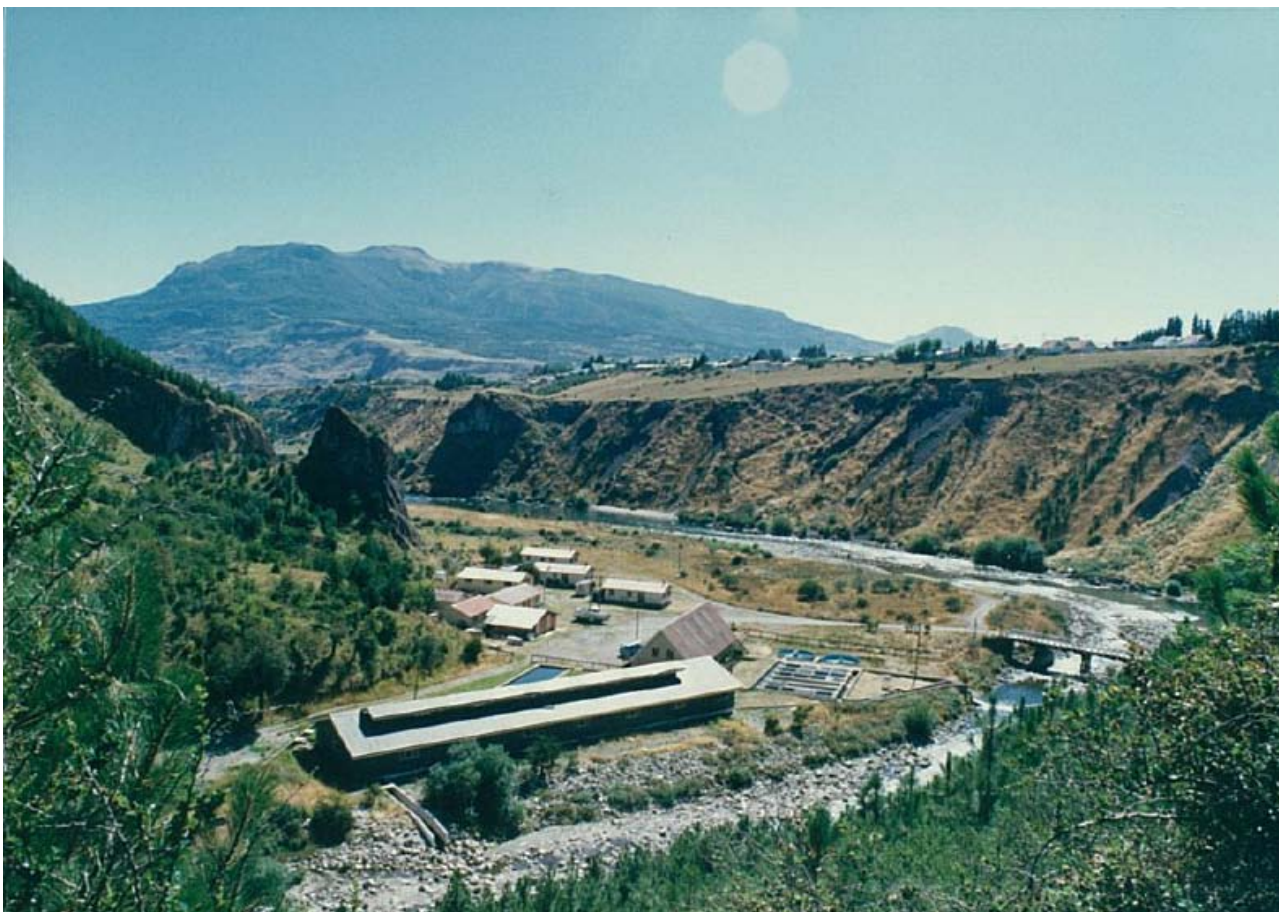


採集した稚魚をカウンターパートに示している長澤専門家。当時、チリ人にとってはサケ稚魚は初めて見る魚であった(1983年)。



セレモニー(稚魚壮行会)

コジャイケ孵化場の完成により、稚魚100万尾放流達成式典及び「稚魚壮行会」。飼育池の排水セキ板を外す直前に日本酒で乾杯。半分は池の稚魚にふりかけ、サケの長旅の門出と無事なる回帰を祈った。(左より3人目:乾杯の音頭をとる長澤専門家、隣:水産庁長官、農牧省漁業次官、山下駐チリ大使)。



新たに屋内飼育池が完成

プロジェクト段階に入り、稚魚生産を300万尾に拡大。大型屋内飼育池を増設（日本側負担）したことにより冬季管理が可能となった（1986年春）。コジヤイケ養魚場は年々拡充された。



プエルト・ナターレスで発見された回帰シロサケをコジャイケに持ち帰り、関係者に示す長澤有晃専門家(右)とパブロ・アギレラ(1986年6月6日)

提供:長澤 有晃 氏



プラト・チコ川

シロサケが発見された川(南緯51°30' 西経72°50')。この湾の名前は皮肉にもウルティマ・エスペランサ(最後の希望)と呼ばれていた。すでにプロジェクトの終了宣言が出されたあとだった。河口部にはフラミンゴの群がいた。南半球に棲息していなかったシロサケは太古の昔に戻り、母川回帰はせず、広域な地域回帰をしながら、パタゴニアの自然界の中で人知れず長い時間をかけて再生産を続けるだろう。

提供:長澤 有晃 氏